

要旨 本発表では、日琉祖語（または琉球祖語・日本祖語）で再建される語を対象に形態的分析を行い、日琉祖語の語形成に関する予備的な結果を報告する。その結果を踏まえて、日琉祖語で再建される2拍以上の語（名詞、動詞、形容的語根）はその多くが複合語あるいは2次的な派生形であるという仮説を提示する。この仮説が正しければ、先日琉祖語は日琉祖語に比べ、(少なくとも語根のレベルにおいて)単音節的な性質がより強かったということが示唆されることになる。この仮説はまた、日琉祖語の声調体系の成立をめぐって大きな意義を持つと考えられる。

1. はじめに

日琉祖語で再建される2拍以上の語の中には複数の形態素から成る語があることがよく知られている (Martin 1987 等)。例えば *nabe₂^{2.5C}「鍋」や *mape₁^{2.5C}「前」は2つの要素から構成される透明な複合語であり、「鍋」は *na「肴」と *pe₂「瓮」に、「前」は *ma「目」と *pe₁「辺」に分解される (『時代別国語大辞典上代編』、『岩波古語辞典』)¹。この2語は日琉諸語の語彙の中で最も古い層に属しているのにも関わらず、2次的な形式である。つまり、この2語は日琉祖語に再建されながらも相対的に新しく形成されたと考えられる。このように、日琉祖語の語彙体系の通時的な性質を理解するためには、再建される2拍以上の語の中でどれぐらいの語が2次的な形式であるかということを明らかにしておく必要がある。

さらに、琉球諸語と日本語を比較すると、明らかに同根でありながら、語形がズレる語が見つかる。例えば、「冷ます・冷める」に対して PR *sam_{as}-^B、*sam_{ar}-^B と Jp sam_{as}-^B、sam_e-^B (<*sam_{ai}-^B) がある。他動詞は同源で日琉祖語の *sam_{as}- 「冷ます」を継承したものと解釈されるが、自動詞は完全に一致しておらず、そのまま同源ではない。具体的に言うと、琉球祖語と日本語の語形は *sama- という語根を共有していながら、異なる動詞派生接尾辞 (*-r-, *-i-) によって形成されている。つまり、この2語に観察されるズレは古い時代の語形成と深く関わっていることが分かる。そのため、日琉諸語に分布する (古い) 語の関係性を説明する上で、日琉祖語の語形成を明らかにすることが極めて有効であると考えられる。

これまで古い時代の語形成に関する研究は多くの蓄積があるが、顕著な偏りが見られる。まず、上代日本語の語形成を対象としている一連の研究 (阪倉 1966、蜂矢 2010a,b 等) は考察対象を (文献の) 日本語に限定している上で、琉球諸語や本土諸方言を一切参照していない。次に、琉球諸語のデータを取り入れた Martin (1987) の研究でも琉球諸語を徹底的に参照しているものの、あくまで日本語を出発点としており、その結果、琉球側にしか分布していない語彙は十分に考慮されているとは言えない。その研究のもう1つの問題点として、細かい形態的分析を行っているのにもかかわらず、その分析基準が必ずしも明記されていないことも挙げられる。

¹ 本原稿では個別方言の語形のアクセントを語形末に付ける上付きの文字で示す。それに対して、高起式と低起式を語形の前に付ける上付きの A と B で示す。初出の略号は PR: 琉球祖語、Jp: 日本語、MYK: 宮古語、TR: 宮古語多良間、Rk: 琉球、YR: 与論、MN: 宮古語水納、K: 九州となる。「<」または「>」は「に変化する」を意味する。甲乙は 1,2 の下付き数詞で示す。なお、本研究は科研費 19K13174、21H00353 の助成を受けている。

これまでの研究で見られる偏りは琉球諸語の語彙研究およびそれに基づいた琉球祖語の再建研究が遅れている状況とは無関係ではない。しかし、この状況は新しい語彙データ（加治工（2020）、渡久山・セリック（2020）その他多数）の近年の公表と、琉球祖語の語彙目録の再建作業の進捗（五十嵐 2016、Celik, Nakazawa, Aso 2022）によって解消されつつある。そのおかげで、日琉祖語の語彙体系を広範囲で再建することができ、結果として、語形成の分析を日琉祖語にまで広げることが可能となっている。本発表ではこの状況を踏まえて上に述べた課題、すなわち、A. 日琉祖語にはどのような語形成があるのか、B. 日琉祖語で再建される 2 拍以上の語はどれぐらいの語が 2 次的な形式であるのか、の 2 つの課題に取り組む。語形成に関する分析基準を明確にした上で、予備的結果および考察について報告する。

2. 語形成の分析基準

語形成を探るに当たり、同じ語根を含む語の語群を同定することが有効な手法であると考えられる。例えば、(1)に挙げる語群は同じ分節音 **pa** から始まり、同じアクセント（高起式）に属し、共通の意味を持っているが、この 3 つの共通点は偶然の結果によるとは考えにくい。つまり、(1) の語は全て *^Apa 「端」という語根を含んでいると想定することができる。実際に Jp ^Apa 「端」という語根が単独で実証されており、この分析が支持される。そうすると、**pa** を除いた部分、すなわち **na**、**si**、**i**、**ta**、**ka** の部分を形態素として抽出することができる。当然、この語群だけを見れば、これらの形態素の意味は明らかではないが、この手順を語彙体系全体に適用すれば、抽出した形態素の正体について手がかりを得ることが期待できる。

(1) Jp ^Apa 「端」、^Apana 「端」、^Apata 「端」、^Apasi 「端」、Jp ^Ape₂ < *pai 「舳」、PR *^Apanata 「先端／崖」、MYK [?]pataka 「端」

語源を探る研究では「母音交替」をむやみに認めたり、アクセントを考慮しない²ことが散見されるが、想定される形態的な分析の妥当性を保障するために、可能な限り客観的な基準に従う必要がある。本研究では共通の語根を含む語群を同定するに当たって、(2) に示す 4 つの基準（A~D）を用いる。

(2) 同じ語根を含む語群の同定基準

- A. 分節音（甲乙も含め）が一致すること
- B. アクセント（式）が一致すること
- C. 共通の意味を持つか、明瞭な意味の繋がりがあること
- D1. 分解した構成要素が独立の根拠で実証されていること
- D2. 語全体の意味が構成要素の意味で説明できること

A と B は語形（分節音／韻律）の整合性、C は意味の整合性、D は形態的分析の整合性の基準となる。また、D2 は D1 が満たされる場合にのみテスト可能となる。検討している語群について(2)の 4 つの基準とも満たされると、帰無仮説（=偶然の結果による類似）、つまり、検討の語群が同じ語根を含まないと

² 例えば、服部（1979）では、^Aki₂ri < *^Akuiri 「霧」と ^Bku₂mo 「雲」は ku という語根を共有していると主張しているが、アクセントが合わない。

いう仮説は確率が極めて低くなると見なせる。(1)の語群については、A-Cの基準が満たされているのに対して、現時点のデータではD1の一部のみ(Apa「端」が実証されている)が満たされるが、同じ語根を含む信憑性はやや高いと言える。

3. 予備的結果：語群の候補リスト

これまで同定した語群の候補の一部(33項目)を提示する。「鍋」や「前」のように語構成が極めて透明な語は扱わない。候補リストには先行研究で既に指摘されているものもある。琉球諸語は Celik, Nakazawa, Aso (2022)とそれに含まれる出典、日本語は主に『日国』および『上代編』を参照しているが、紙幅の関係で比較データは省略する。語群に属するか疑わしい語は「?」を付ける。語群の後に「/」の記号で解説を導入する。甲乙は対立かつ情報があれば示すが、それ以外は無表示のままにする。

(2) 語群候補リスト (アルファベット順)

- *^Aa「粗」: ^Aa+kuta「芥」(cf. TR afuta^A, arafuta^A, arifuta^A)、^Aa-r-a「粗」、^Aa-r-a-「粗い・荒い」、^Aa-r-a-i-「荒れる」、^Aa-r-a-p-「洗う」、? ^Aa+ba-r-a-i-「暴れる」/ ^Aa+kuta は並列複合語で「収穫後の不要物」を構成要素に持っており、「粗」と非常に近い意味を持つ。[†]ar-「荒れる(不要物になる?)」という動詞は実証されていないが、ara「粗」を状態言由来と考えれば、想定せざるを得ない。akuta は arikuta の縮小形ではなく、ara「粗」の古形に当たる a「粗」を含むと考え、多良間の arafuta と arifuta は後世に作り直された形式であろう。^Aara-「粗い」と^Aara-「新しい」の関係は要検討である。
- *^Ba「交差」: ^Ba-m-「編む」、Jp ^Ba-z-a-p-a-r-「(絡み合うようにして)巻きつく」、Jp a-z-a-p-a-i-「組み合わせる」、^Ba-z-a-i「畔/交差」、Rk ^Ba-z-a-i-「交差する」/am-「編む」における m は形容的語幹などに付く -m- とは異なる。意味からして継続性を表す -p-に通じると考えられる(cf. ^Bna-p-「縫う」、nu-p-「縫う」)。
- *^Ai「石」: ^Ai+pa「岩」、^Ai+so₁「磯」、^Ai+so-i「石」、^Ai=na+go「砂」
- *^Aja「痩せる」: Jp ^Aja-se-「痩せる」、Rk ^Aja-ke-「痩せる」、Rk ^Aja-Ce-「痩せる」、Jp ja-w-a-p-「痩せる」琉球の jaCe- は *ja-j-a-i- に遡ると考えられる。
- *^Bja「破る」: ^Bja-r-「破る」、^Bja-r-a-i-「破れる」、^Bja-bu-r-「破る」、Jp ja-bu-k-「破く」
- *^Ajo₂「寄る」: ^Ajo₂-r-「寄る」、Jp jo₂-s-「寄せる」、^Ajo₂-s-a-i-「寄せる」、Rk ^Ajo-[d][u]r-「寄る」、Jp jo₂-s-o₂-r-「自然に寄せられる」、
- *^Aju「揺れる」: ^Aju-r-「揺さぶる/揺れる」、Jp ju-sa-bu-r-「揺さぶる」、Jp ju-bu-r-「揺さぶる」
- *^Aka「香」: Jp ^Aka「香」、Jp ^Aka-g-「嗅ぐ」、Rk ^Aka-b-「嗅ぐ」、Rk ^Aka-b-a「香り」、^Aka-z-a「香」、? ^Aka-z-a-r-「飾る」/日琉間で「嗅ぐ」に見られる活用の違いは異化、つまり*ka-g->kab-によって生じたと見ることもできる一方、異なる接尾辞によって形成された動詞という可能性もある。ただし、その場合、ka-b- は ka-g- に比べ継続性の意味合いが強かったことが予測される。意味的な繋がりが明白ではないが、「飾る」がこの語群に加わるかもしれない。
- *^Bka「痒い」: ^Bka-j-u-「痒い」、^Bka-k-「搔く」/「痒い」と「搔く」は明瞭な意味の繋がりを持っており、両方の概念を同じ語形で表す言語もある(フランス語 gratter「痒い/搔く」)。「痒い」も「搔く」も D1-D2 の基準をクリアしている(cf. ^Bsu-j-u-「酸っぱい」・^Bsu-j-a-i-「饅える」、Jp pa-j-u-「眩しい」・^Bpa-j-a-i-「映える」、動詞派生接尾辞の -k- については別の機会に譲る)。
- *^Bka「掛ける」: *^Bka-g-i「鉤」、*^Bka-r-i「(銚の)返し」、Jp ka-k-「掛ける」、^Bka-k-a-r-「掛かる」、^Bka-

k-a-i-「掛ける」。

- *^Bku「腐る」: ^Bku-sa-「臭い」、^Bku-sa-r(-a-i)-「腐る」、^Bku-t-u-i-「朽ちる」、Jp ku-t-a「芥」／「朽ちる」は琉球諸語の語形より *kutui-「朽ちる」が再建される。^Bkusa「草」は分節音・アクセントが一致しているが、意味的なつながりは明瞭であるとは言えない。しかし、植物系のゴミである「芥」を考えれば、繋がりが全くないとも言えず、同源かもしれない。
- *^Ama「丸／回る」: ^Ama+ro「丸」、^Ama+to₁「的」、^Bta+ma「玉」、^Ama-k-「巻く」、^Ama-p-「舞う」、^Ama-p-a-r-「回る」、^Ama-p-a-s-「回す」、Jp ma-g-a「勾」、^Ama-g-a-r-「曲がる」、^Ama-g-a-i-「曲げる」、? ^Bmaari「毬」、? Rk ^Bmaako「丸」／後者2語も *maを含んでいると考えられるが、アクセントが合わない。第一音節に長音が再建されることと無関係ではないであろうが、未詳である。
- *^Bma「下半身関係?」: ^Bma-g-「交わう」、^Bma-r-「排泄する」、^Bma-r-a「男根」。
- *^Bmo「振じる」: Jp ^Bmo-g-「挽ぐ」、^Bmo-r-「挽ぐ」、^Bmo-d-o-i-「振じる」。
- *^Ana「鳴く」: ^Ana「名」、^Ana-i「音」、^Ana-r-「鳴る」、^Ana-k-「鳴く」。
- *^Bna「成る」: ^Bna-r-「成る」、^Bna-s-「成す」、^Bna-r-a-p-「習う」、^Bna-r-a-i-「慣れる」、^Bna-r-a-s-「慣らす」。
- *^Bna「刃」: ^Bkata+na「刀」、^Bna-g-「薙ぐ」、Rk ^Bira+na「鎌」／「薙ぐ」は刃物限定の動作を指しており、フランス語の *sabr-er*「サーベルで切る」と全く同じ発想である。
- *[?]nai「成るもの?」: ^Bta+nai「種」、^Bsa+nai「実」、^Bi+nai「稲」、^Bjo+nai「米」／この語群は明らかに1つのパラダイムをなしているが、*taを除いて、sa、i、joの要素が不明である。*ta+naiは前部要素の通り、丸い物を指すのに対して、*saneは細長くなっている砂糖黍の苗など丸くないものを指す。また、*naiは*^Bna「成る」と関係しているかもしれない。
- *^Ao「遅い」: ^Ao-p-「追う」、^Ao-kure-「遅れる」、Jp ^Ao+so-「遅い」／「追う」は「後から行く」という意味を含むため、「遅い」や「遅れる」との意味的な繋がりが見いだされる。
- *^Bo「落ちる」: ^Bo-r-o₂-i-「下りる」、^Bo-r-o₂-s-「下す」、^Bo-t-o₂-i-「落ちる」、^Bo-t-o₂-s-「落とす」、^Bo-t-o₂-r-「劣る」／「下りる」と「落ちる」はA~Cの基準を満たしていると言える。つまり、同じ分節音から始まり、アクセントが一致し、「下方への動き」という意味を共有している。そのため、無関係である確率は低く、同じ語根 *^Bo「下方への動き」を共有していると見ることができる。
- *^Bo「大きい」: Jp ^Bo「大きい」(蜂矢(2010b)参照)、^Bo-j-o-i-「老いる」、^Bo+po-「大きい」、^Bo+po-i-「生える」、^Bo-j-a「親」／*^Apo「サイズ」参照。
- *^Apa「端」: Jp ^Apa、^Apa+si「端」、^Apa+na「端」、^Apa+ta「端」、Rk ^Apa+na+ta「端」、MYK pa+ta+ka「端」、Jp ^Ape² < *pai「舳」、? ^Apa+zime-「始める」。
- *^Bpa「這う」: ^Bpa-p-「這う」、^Bpa-j-a-i-「生える」／pa-j-a-i-「生える」とo+po-i-「生える」は意味の上で対立していると考えられる。宮古語ではpa-j-a-i-「生える」は這って伸びる植物または草のように低い植物に言うのに対して、o-p-o-i-「生える」は上に向かって伸びる植物に言う。この区別は原義の反映と考えられる。pa-p-「這う」における-p-は継続性の意味を担う。
- *^Bpa「皮」: ^Bpa-g-「剥ぐ」、Rk ^Bpa+muk-「皮を剥く」、Rk ^Bpa+muke-「(皮が)剥ける」、^Bpa-da「肌」、Jp ^Akani-pa「樺」／琉球祖語の *pamuk(e)^B- は明らかに *muk(e)-「剥く／剥ける」を含んでいるため、それを差し引いて残る *paは「皮」を表していると考えられる。日本語の「樺」も樹皮を指しており、それに含まれるpaがその意味を担っていると考えられる。
- *^Apo「サイズ」: ^Bo+po-「大きい／多い」、^Apo+do「程」、Rk ^Apo+C[e]「大きさ」、Rk [?]po+sa「量」／

「量」は YR *pusa*^C、TR *puea*^C、MN *pusa*^B だが、この語は表現の後部要素 (nu:nu *puea* 「いくら?」) として使われていることが多いため、本来のアクセントが継承されていない可能性がある。

- *^Bpi₁ 「冷たい／氷」: Jp ^Bpi₁ 「氷」、K ^Bpi-j-a- 「寒い」、^Bpi-j-a-i- 「冷える」、Rk ^Bpi-j-a-i- 「寒い」、Rk ^Bpi+kor-i 「冷え」。
- *^Bsa 「寒い」: ^Bsa-m-a-s- 「冷ます」、Rk ^Bsa-m-a-r- 「冷める」、Jp ^Bsa-m-a-i- 「冷める」、Jp ^Bsa-j-a-i- 「冴える (冷え込む)」、Jp ^Bsa-m-u- 「寒い」 / この語群は Martin (1987) にも提案されている。[†]sa-m- 「寒くなる」という動詞は実証されていないが、*sa-j-a-i- と情態言の sa-m-a よりかつて存在していたと推測される。sa-m-a をもとに形成される自他の対は「垂れる／垂らす」と同じように、古い対の [†]sa-m- 「冷める」・sa-m-a-s- 「冷ます」の後身であると考えられる。特に、自動詞の形成は日琉で異なることがポイントで、日琉祖語では [†]sa-m- がまだ生きていた可能性が示唆される。
- *^Asi 「下」: *^Asi+ta 「下」、*^Asi+mo₁ 「下」、^Asi+dum- 「沈む」 / 「沈む」については Whitman (1985) および PR *sum- 「沈む」参照。
- *^Bta 「垂れる」: ^Bta-r- 「垂れる」、^Bta-r-a-s- 「垂らす」、^Bta-r-a-i- 「垂れる」、Jp ta-j-u- 「弛い」 / tar- 「垂れる」と taju- 「弛い」のペアより、*^Bta 「垂れる」という語根が抽出される。形容詞を形成する -j-u- については *^Bka 「痒い」参照。
- *^Bta 「絶つ」: ^Bta-t- 「絶つ」、Jp ^Bta-j-a-i- 「絶える」。
- *^Bta 「丸い」: ^Bta+nai 「種」、^Bta+wara 「俵」、^Bta+^Ama 「玉」、Jp ^Bta+mi₂- 「回る」 / 単独の mi₂ 「回る」と ^Bta+mi₂- の比較より *^Bta という形態素が取り出せる。そうすると、*ta+ma 「玉」は並列的複合語で、後部要素は *^Ama 「丸い／回る」であると考えられる (*^Ama 「丸」参照)。
- *^Ato₂ 「止まる」: *^Ato₂-m-a-r- 「止まる」、*^Ato₂-m-a-i- 「止める」、*^Ato-r-o-i- 「(風が) 凪ぐ」、^Ato-r-o-m- 「止まる」
- *^Ato₂ 「飛ぶ」: Jp to₂ 「鳥」、^Ato₂-r-i 「鳥」、^Ato₂-b- 「飛ぶ」、Jp ^Ato-b-i 「鳶」 / 「鳥」は総称で、「鳶」は個別種だが、同じ発想で作られた語である。

4. 考察

● 語形成: 2 拍以上の語が通時的に複数の形態素に分解されるという作業仮説のもとで、2 節で説明した手法を用いてみたが、(2)の基準を殆どすべて満たす語群が多く見つかることが分かる。3 節で提示した形態的分析が正しければ、日琉祖語に遡る多くの形式が相対的に新しく形成されていることになる。つまり、先日琉祖語は日琉祖語に比べ、(少なくとも語根のレベルにおいて) 単音節的な性質がより強かったということが示唆される。

● 動詞の変遷: 3 節の語群に含まれる動詞に着目すると表 1 に示す変遷プロセスが得られる。「CV-派生接尾辞-」の 1 次的派生形 (四段活用動詞に当たる) が最も古く、情態言 (-a) を経て反対の他動性の 2 次的派生形が形成される。最後に、2 次的派生形を基に反対の他動性の 3 次的派生形が形成される³。意味のずれが生じれば、1 次的形式が後世に継承される場合もある (「舞う」) が、1 次的派生形と 3 次的派生形がほぼ同じ意味になるため、1 次的派生形が消滅の運命をたどる (「掛ける」「垂れる」)。場合によっては 1 次的派生形が実証されていない (「冷める」「荒れる」「冷える」) が、実証されている対の語形成が「掛ける」「垂れる」とパラレルであるため、かつて存在していたことが推測される。

³ さらに南琉球では kakar-as- 「掛ける」のような 4 次的派生形が形成されていく現象が観察される。

表 1 動詞の派生過程 (For : 動詞派生接尾辞、他 : 他動詞、自 : 自動詞)

派生段階	1 次派生	2 次派生	3 次派生
CV	CV-For{-p-, -m-, ..., -k-, -g-}-	CV-For-a	CV-For-a
		-s- (他) -i-, -r- (自)	-i-, -r- -s-
* ^A ma 「丸／回る」	ma-p- (自)	ma-p-a-r-	ma-p-a-s-
* ^B ka 「掛ける」	ka-k- (他)	ka-k-a-r-	ka-k-a-i-
* ^B ta 「垂れる」	ta-r- (自)	ta-r-a-s-	ta-r-a-i-
* ^B sa 「寒い」	†sa-m- (自)	sa-m-a-s-	Jp sa-m-a-i- Rk sa-m-a-r-
* ^A a 「粗」	†a-r- (自)	a-r-a-s-	a-r-a-i-
* ^B pi ₁ 「氷」	†pi ₁ -j- (自)	pi ₁ -j-a-s-	Jp pi ₁ -j-a-i-

5. 類と語形成の関連について

日本諸方言の韻律体系の比較により、日本祖語の 2 拍名詞については (少なくとも) 5 つ、3 拍名詞については (少なくとも) 6 つのアクセント類が再建されてきた (金田一 1974)。類の所属が語彙的な特徴として捉えられきたが、Igarashi (in preparation) の研究が示唆しているように、類の所属と通時的な語形成は必ずしも無関係ではない。その研究によると、複合語に由来する 3 拍名詞の中で 4 類と 5 類に所属する名詞は後部要素のアクセントによってその類が決まっている。すなわち、4 類に分類される名詞は後部要素に 2 拍 3 類の名詞を後部要素に持つのに対して、5 類に分類される名詞は高起式か 2 拍 4 類の名詞を後部要素に持つ傾向が認められる。

本発表で提示した語形成に関する仮説が正しければ、2 拍以上の語の多くが (通時的に見れば) 複数の形態素から構成されているため、それらの語が分類される類と、それらの語が形成された時に適用された規則的な音調規則との間に関連性が見られるはずである。つまり、Igarashi (in preparation) と同様の傾向を見出すことが予測される。

参考文献

- 五十嵐陽介 (2016) 「アクセント型の対応に基づいて日琉祖語を再建するための語彙リスト「日琉語類別語彙」『日本語学会 2016 年度春季大会予稿集』: 233-238 / Igarashi, Yosuke (in prep.) “Is it possible to reconstruct compound accent rules in Proto-Japonic?” / Whitman, John. 1985. *The phonological basis for the comparison of Japanese and Korean*. Ph.D. thesis, Harvard University / 大野晋・佐竹明広・前田金五郎 (編) (1974) 『岩波古語辞典』岩波書店 / 加治工真市 (2020) 『鳩間方言辞典』国立国語研究所言語変異研究領域 / 金田一春彦 (1974) 『国語アクセントの史的研究—原理と方法』東京: 塙書房 / 阪倉篤義 (1966) 『語構成の研究』角川書店 / 上代語辞典編修委員会 (1967) 『時代別国語大辞典上代編』三省堂 / Celik, Kenan, Nakazawa, Kohei, Aso, Reiko (2022). A proto-Ryukyuan Database: an aggregating model of dialectal lexical data. paper presented at Methods XVII / 渡久山春英・セリック・ケナン (2020) 『南琉球宮古語多良間方言辞典』立川: 国立国語研究所言語変異研究領域 / 日本国語大辞典第二版編集委員会、小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典 第二版』小学館 / Martin, Samuel E. 1987. *The Japanese language through time*. New Haven: Yale University Press / 蜂矢真郷 (2010a) 『国語派生語の語構成論的研究』塙書房 / 蜂矢真郷 (2010b) 『古代語の謎を解く』大阪大学出版会 / 服部四郎 (1979) 「日本祖語について・21」『月刊言語』8(11): 97-107 / 服部四郎 (1979) 「日本祖語について (20)」『言語』8(10):105-115 大修館書店。